



奴隷妻真奈美の漂流



第一部

肉欲の代償



大手製薬会社の部長である蛭田は、次の獲物を着々と追い込んでいた。標的は部下の川瀬の妻・真奈美28才である。

二人の結婚式で初めて見たウエディングドレスの真奈美は、ドレス姿の美しさも去る事ながら、溢れんばかりの豊かな肉付きを持っていて、どの出席者の女性よりもむしやぶり付きたくなるような色香を漂わせていた。

蛭田はひと目で真奈美を計画のリストに入れる事に決めた。

まずは夫を単身赴任で海外の支社へ飛ばし、一年間は帰って来られないように仕掛ける。真奈美をセックスレス状態にする為だ。そうすることで女は肉欲の感度が上がり、牝へと堕ちやすいのだ。

次に、真奈美の日々のスケジュールを把握し見張るように付け回していた。

「見れば見るほどたまらねえ人妻だ。」蛭田はすぐにでも襲いかかりたい衝動を必死に抑えていた。

3ヶ月後、いよいよ真奈美に手を付けることにした。

車を川瀬夫妻のマンションの前に停めると、程なくして真奈美が買い物かごを抱えて帰ってきた。蛭田は腕時計を見やり、時間通りだと確認すると、計画が上手く運ぶ予感を覚えた。

そして、いやらしい目つきで真奈美の豊かな胸と尻を砥めまわす。

真奈美の目には、夫に会えない寂しきとはまた別の憂いを帯びていた。

「へへへ。あのムチムチした体に性欲が溢れるほど溜まっているのが一目瞭然だぜ。」

縄と淫具の詰まったバッグを後部座席から引き寄せて抱えると、車を降り今しがた真奈美が入っていったドアへ向かった。

腹が出始めてる夫とは違って、蛭田の筋肉質の体はまるで熱い岩に触れているようで、きつく抱きしめられたいという衝動が何度も頭をよぎった。

また、喫煙する夫との舌を絡めるキスは苦くて嫌悪感を抱いていたが、タバコを吸わない蛭田とのキスは肉と肉が融け合うような生々しい感覚を深く感じてしまうのだった。

それはもちろん蛭田には分かっていた。全ては日常の性生活に慣れてしまった人妻を落とす為の体作りである。



「どうだ奥さん？旦那とは違うだろ？」

（もう…ダメ、このままでは愛になってしまう…）

そう思うとすればするほど、蛭田が操る張り型の無数の突起を胎内で敏感に感じ取ってしまうのであった。

すると突然、蛭田が入れたままにしていたアナルビーズを一気に引き抜いた。張り型の突起がアナルビーズと薄い粘膜を挟んで擦れ、得も知れぬ快楽が全身に走った。

「ああ！ヒイイ！」真奈美は一気に絶頂に登りつめる。

蛭田に体を預けるように仰け反ると、何度も体を痙攣させながら官能の渦へ飲まれていく。

（こ、こんなのって…初めて…）

真奈美は、心の何処かでガラガラと壁の崩れる音が聞こえるような気がした。

四つん這いのまま真奈美が振り返ると、蛭田が長大な浣腸器にぬるま湯で薄めたグリセリンを吸い上げているところだった。

「たっぷり浣腸してお腹の中を綺麗にしてあげるぜ、奥さん。」

真奈美の怯えた顔を見た蛭田は、500cc たっぷり入った浣腸器をどうだと言わんばかりに見せつけた。

「か、カンチョウなんていやあ……」真奈美は白く美しい尻を振って抵抗する。

すると、黒沼が尻をビシャッと叩き、

「おとなしくするんだ！ 気持よくしてやるから！」と一喝し、両手で美尻を鷲掴みにして肛門がむき出しになるように必要以上に力強く割り広げる。

「ああ……」真奈美は観念したようにうつ向き、抵抗するのをやめた。

それを見た2人は、従順になりつつある人妻の成り行きに目を合わせてニヤリとほくそ笑む。

「さ、尻を突き出すんだ。」

蛭田の言葉にオズオズと尻を差し出した。

浣腸器のノズルが秘肛に入り込むと真奈美は「あつ」と小さく声を上げたが、もう抗う素振りは見せない。

「たくさん飲むんだぞ。」

シリンダーが押され薬液がドクドクと真奈美に注入される。

「ああ、だめ……」

言われ用のない感覚が襲い、真奈美の全身からドツと汗がにじみ出る。

黒沼は「人っていく、人っていくぞ。」と嬉しそうに真奈美と浣腸器との結合部を覗きこんでいた。

愛しい旦那とのベッドの上で、真奈美は尻を高くもたげて薬液を飲み込んでいく。

真奈美は唇を噛んで耐えていたが、直腸の敏感な所に薬液が当たると感じる。まるで肛門に射精されている錯覚に陥っていた。





「初めての割りにスムーズに入るじゃないか。アナルの素質は抜群だな。」

蛭田は真奈美の両脚を抱えると自慢の筋力で軽々と持ち上げた。

「あああ！」

真奈美がひときわ大きな喘ぎ声を上げた。自分の重みで蛭田と根元まで深く繋ったのだ。

まるで蛭田の体から落ちまわいと、肛門で蛭田自身を必死で掴んでいるようだった。なおさら肛門に入ってるモノの形が、嫌でも感じられてしま

う。

「社長、いいですね。」

そう言うと蛭田は開脚させた真奈美のしつとりとした割れ口を黒沼に向けた。

「い、いや…怖い…」

後手に縛られ両足を抱えら

れた真奈美は、首を僅かに振ることでしか抵抗できない、

「何が怖いだ。いずれ前後に2本を喰えなきゃ満足できない体にしてやるよ。」

黒沼は人並み以上の自慢の剛直を割れ目にあてがうと、ゆっくりと沈めていった。

「はあ…うう…む」真奈美は自分の中に2本あることをしつかり感じ取っていた。そして、2本とも自分の一番感じやすい所に当たっていることも…。

「どうかね？初めてのサンドイッチは？」

そう言うと、黒沼も最奥まで突き上げる。

しかし真奈美は、のけ反ったままで口の端からよだれを垂らすほど放心状態であった。まだ抽送運動をしていないのにもかかわらず、巨大な快楽に飲まれていたのだった。

「どうした奥さん？感想を言ってみるよ。気持ちが良いすぎて言葉にならないか？」と今度は蛭田が強く突き上げた。

「ああ、ま、前も、お…お尻にもしてくれるから、いい…。ま、真奈美、気持ちいい…」

蛭田がワゴン車の後部座席を倒しフラット状にすると、一条縄わぬ真奈美を仰向けに寝ころがし縄で大の字に縛りはじめた。真奈美はされるがままに縄で拘束されていく。

蛭田はエンジンを掛け、車を出した。静かな住宅街から、バス通りに入る

「何処へ行くというの...？」

さすがに不安になったのか、真奈美が聞いた。まだ夕方であるにもかかわらず、窓の外を見てもスモークが貼つてるせいもあり暗くて何も見えないのだ。

「会長の別荘に我が社の株主が集まっていますね。パーティーを開くのです。」

そう言うとき黒沼は潤滑剤を塗った2本の淫具を真奈美の2つの肉穴に突き刺入れた。

「あん！」いきなり敏感な部分を刺激され、腰を悩ましくくねらせる。

真奈美は、そのパーティーがどういふものなのかを考えたが、快楽の波が覆いかぶさり思考を萎えさせた。

黒沼が尖らせた舌先でチロチロと真奈美の下半身を丹念に舐めまわし始めたからである。

ヘソから下腹部、内股、太腿と丹念に舐めまわすが、真奈美の中心は舐めようとしな

車は高速に乗り、スピードを上げ海の方へと向かう。



「あ...あん、はあ...ん。」

真奈美は繋がれた縄を切らなばかりにクネクネと身悶える。

火の着いた肉体は収まることを知らず、食欲に更なる快楽を求め始める。

真奈美の心と体は、たやすく性欲に支配されるようになっていた。

「い。一度...イかせて...」

黒沼は挿入したままの2本を動かすどころか触ろうともしないで、真奈美の体を舐め続けていた。

「お、お願い...、焦らさないで...、これじゃ、イケない...」

真奈美は淫具をいじつてくれと言わんばかりに腰を浮かせ、股間を黒沼に向けて哀願するのだった。

「ねえ...真奈美、イキたいの...」

真奈美の股間からニョッキリと突き出ている2本がいやらしく揺れる。



「最後に紹介するのは人妻の川瀬真奈美です！」

マイクを通した蛭田の声が響くと、暗い広間の中でスポットライトが白く透き通るような真奈美の体を浮かび上がらせた。

観客からため息のような感嘆の声が上がる。

豊かな乳房。ピンク色の乳輪と乳首。美しい腰のラインと張りのある臀部。

後ろ手に縛られているため隠せないでいるY字部分は黒沼に剃毛され、生々しいスジが露わにされていた。」

真奈美は恥ずかしげにうつ向いたままだったが、男たちの視線が敏感な部分を真綿で撫でているようで、体が火照るのを自覚していた。

乳輪が充血し男たちを挑発するかのようにつんと突り、股間には蜜が滴り始める。

(ああ…こんなことって…)

真奈美は自分の体の成り行きが信じられない。大勢の男性の前で辱めを受けているのに、感じているのだ。

一度服を切った性欲は止めることが

出来ず、真奈美はモジモジと大腿部をこすりあわせ始めた。

その様子に気づいた蛭田が言葉で追い打ちをかける。

「この奥さんはここに来る車の中で黒沼社長に攻められるも、焦らしに焦らされてイカされることは許されませんでした。どうか皆さんの手で開放してやって下さい。」

男たちがざわめくのを聞いた真奈美は、まるで自分が多くの猛獣に囲まれ狙われている仔鹿になったように思えた。しかし、そのたぐさんの猛獣に跳びかかられて自分に食らいつく事を期待してしまうのだった。

(早く楽にして…みんなで真奈美をメチャクチャにして…)

「それでは開始致します。お好きな方と朝まで思う存分お楽しみ下さい！」

蛭田がマイクを置くと、男たちが一斉に動き出した。

「あ…」「あん!」「ああ!」

逆さ吊りで口ウソク責めを受けているのは一児の母である杉村香苗だ。蠅滴がポタポタと双乳に落ちる度に悩ましい声を上げている。

会社と取引のある病院の看護婦・青山真理子は何年も前からこのパーティーに参加している。

「…気持ちいいわ…もつとしてえ…もつとお…ひいい…!」

片足吊りで露わになった恥部の豆を丹念に舐め続けられ、もう何度も登りつめていた。

会社の営業部の水谷百合は、大株主の男に特別室へ連れて行かれ個人的に調教を受けていて姿が見えない。

真奈美はというと、名誉会長の荒沢に裏門を責められていた。

「どうじゃ。ここか?ここをこうか?」

荒沢が真奈美の体内に差し入れた淫具を巧みに動かして愉悅を与える。同時に他の男が前門を責め立てている。

「はい…き、気持ちいいです…ああ、ああ、イキそう…。」

真奈美が美しい顎のラインをのけぞらせて、絶頂に向かうと、2人は淫具を動かすのをピタッと止めてしまう。

「こら、誰がイって良いと言った!」

「ああ、申し訳ありません…。でも…。」

いつものように焦らされて真奈美は息も絶え絶えに訴えた。

「でも、なんじゃ?こうして焦らした方がイク時に一層気持ちよくなるじやろ?」

荒沢が真奈美の顔を覗きこみ、耳元で諭すように聞く。

「はい…」真奈美は小さくうなずいた。

そうすると2人はまた淫具を動かし始める。

「今度はイッていいぞ。」

「は、はい…ありがとうございます…。」荒沢の許しを得た真奈美は嬉しそうに答える。

真奈美は一匹の性奴隷となっていた。





真奈美は「どうして？」と言わんばかりに、何もしてこない荒沢を振り返った。その顔は快楽を求めるメスそのものだ。

「どうしたね？何かおねだりか？」

荒沢が聞くと、真奈美は観念したように催促の言葉を口にした。

「う、後ろにも…入れて下さい…。」

「前だけじゃ物足りないというのか？」

「…はい。」

（2本を啜えなきゃ満足できない体にしてやるよ）

真奈美は蛭田の言葉を思い出していた。ノーマルなセックスしか知らなかった頃が遠い昔に思えた。

「よしよし、いい尻じゃ。」と荒沢は両手で真奈美のムキ卵の

ような美臀を撫で回すと、割り広げて菊門を晒す。

老人のモノとは思えないほど力強い肉の棒を真奈美の第二の性器となった穴にあてがう。そして、ジリジリと腰を突き出し深々と貫いていく。

「はあ…ん！」

真奈美は、直腸に硬く熱いモノを感じ取ると、電気が流れたように体をのけ反らす。縄でくびり出された張りのある豊乳がプルンと揺れた。

前を犯している名前も知らぬスキンヘッドの男がゆつくりと動き出すと、荒沢は逆の動きで出し入れを始める。薄い粘膜を隔てて2本の肉棒がこすれ合い、この世の物とは思えぬ悦楽が全身の肉をドロドロに溶かした。

「ひい！ダメえ…！変になっちゃう…！」

真奈美は、自分が2人の男に挟まれている『ただの性器』に思えた。

「ああ！真奈美、イキます、…イ、イクう…！」

「ほれ、ほれ、どうじゃ、真奈美？」

不意に名前を呼ばれハッとした。いったい自分が名前で呼ばれるなんていつ以来だろう？

主人には「おまえ」と呼ばれ、近所の人からは「川瀬さんの奥さん」と呼ばれ、いずれ子供が生まれたら「○○ちゃんのお母さん」と呼ばれる事を想像していた。主婦は自分を押し殺して生きていくものだと諦めていた。

しかし、真奈美は名前を呼ばれて嬉しかった。

締めきつた暗い部屋に縄で拘束されて、老人と2人きりで淫らな行為をされている最中にもかかわらず、自分の存在を認めてくれたようで嬉しかった。

「…嬉しい。」思わず呟いていた。

自分を認めてくれて、体まで気持ちよくしてくれる。そんな男に陶醉していた。

ついに真奈美は体だけでなく、心までも堕とされたのだった。

「ん？嬉しいか？尻が気持ち良くて嬉しいか？」

荒沢は、数字が記してあるコブが繋がった1mもあろうかという長さの責め具を肛門へ入れていく。

「ひひひ、真奈美の尻は本当に可愛いもの。」

「ああ…もつと可愛がつて下さい…。真奈美にいつぱい恥ずかしい事をして下さい…。」

そう言うと、真奈美は背中へ縛られた手でデロリと萎えている荒沢自身を探り当てた。

そして、強要されてもいないのに不自由な手で優しく上下に擦り上げる。



「おお、いいぞ真奈美！」

荒沢は真奈美のサビビスに驚きつつも、すっかり入った責め具を今度はコボンコボンと「コブずつ出していく。」

「ああ！ああん！」

その強烈なA感覚に絶頂へ向かうと自ら感じた真奈美は握った手を早め、「い、一緒にイッてえ…」と哀願する。

荒沢は負けてたまるかと言わんばかりに残りのコブを一気に引き抜きぬく。真奈美はひとたまりも無かった。

「ひい！イクうー…！」

体をガクガクと痙攣させ絶頂に達した真奈美の顔は、今までにない幸せな顔をしていた。



「旦那の出張中に妻が浮気して蒸発なんてよくある話さ。」蛭田と黒沼が顔を合わせてゲラゲラと笑う。真奈美は遠い海外にいる夫の顔を思い出そうとしたが、思い出せなかった。

（ああ…あなた、真奈美を許して…）

縄で縛られ、猿轡をされ、まるで荷物のように扱われると、自分は奴隷として生きてるしかないのだと悟る。

それでも、日常生活では到底手に入らない快楽を与えて貰えることに幸せを感じていた。

「研究所に着いたら気持ちの良い実験をたくさんしてやるからな」

荒沢が箱に入れられた真奈美に声を掛ける。真奈美に新薬の実験をすることばかり考えていた。媚薬入りの流腸液や座薬型女性用回春剤、肛門用筋肉弛緩剤…。

『実験』と聞いた真奈美は恐怖よりも、どんな淫らな行為をされるのかと思うだけで下腹部の火照りを感じる。

「船に乗ったら出してやるから、それまでの辛抱じゃ。」箱の蓋が静かに閉められ、箱の中は暗闇になった。

真奈美は怖かったが、ランダムな時間で動き出すパイプが両穴で振動を始めると、官能以外の感情は消し飛ぶ。

パイプが真奈美を慰めるように蠢き、真奈美は猿轡の下で声にならない喘ぎ声を上げた。

「絶対にあの男には渡さないからな。」箱を見下ろしながら荒沢がいぶかしげな顔をする。

『あの男』と聞いただけで蛭田と黒沼の顔に緊張が走った。そんな不穏な空気を箱の中の真奈美は知る由もない。

夕日が落ちる中、真奈美を入れた箱が車に積まれ、船の待つ港へと向かっていった。



奴隸妻真奈美の漂流

第二部前編 天獄の姫君



その施設は海沿いの切り立った崖の上にあった。

深い森に埋もれた広大な敷地に、隠れるように高いコンクリートの塀が延々と続いている。監視カメラやセンサーなどの近代的なセキュリティは見当たらず、塀の上の有刺鉄線が時代を物語っていた。

その塀の中に寂れた病院のような建物が建っている。完全に秘密の施設のため陸路からの道路は無く、崖下へ船で行くことしか入ることは出来ない。それは施設から逃げることは出来ないということでもあった。

しかし、連れてこられた女性達の生活は快適だった。

常時十人ほどの女性が囲われていたが、それぞれに豪華な個室が用意され、まるで中世の王族のような待遇を受けていた。毎日のように最高級のエステやマッサージを受けることができ、食事も美容と健康を第一に考えられたものだった。

塀の外へ出る自由は無いが、施設から逃げようと思う者はいない。一般の生活を送っている女性では到底得られることの出来ない性の快楽から彼女たちは離れようとは思わないのだった。

また、そのように女性を大切に扱ってくれている荒沢氏への想いも芽生えていた。

建物に囲まれた広い中庭の木陰にテーブルと椅子が置かれ真奈美が座っている。

晴れた日はそこで朝食を取るのが日課になっていた。



優雅に紅茶を飲みながら子供の頃に読んだ絵本を思い出していた。

悪い魔法使いに囚われて塔に閉じ込められたお姫様の絵は少女ながらに言い知れぬ興奮を覚えた。

綺麗なお姫様が縛られ、磔にされ、どんな酷いことをされているのかを自分に置き換えて想像してしまうのだった。

(あの頃からマゾの気があったのかしら……)

何も知らない少女だった自分を懐かしんで微笑んでしまう。

朝食を済ませた頃に荒沢がやってきた。

「真奈美、時間じゃ。今日はじっくり時間を掛けるぞ」

「はい……。よろしくお願いします……」

真奈美は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

そして、無意識に荒沢に背を向け両手を背中に回し、縛られる準備をする。

それを見た荒沢は満足そうにニヤリと笑みを浮かべるのだった。

荒沢は催淫クリームを指に取り、秘孔の隅々に丹念に塗り込めていく。枯れ枝のような指がコリコリと肉ひだを刺激する。

「どうじゃ？効き目は？」

クリームを塗り込められた粘膜は熱く燃え始め、その熱がたちまち全身に駆け巡った。

「き、効いています……」

「どう効いているのか、言わないか！」そう言って美しい臀部をビシャッと叩く。

「ああ！」叩かれた痛みさえ快美に変わり全身を駆け巡る。

「か、体が、体が熱くなってきました……」

真奈美は、きつく目を閉じて呼吸を荒げはじめた。内股がむず痒くなり、乳輪が硬く尖り、陰唇から、いやらしいヨダレが溢れだすが自分でも分かった。

「ひひひ、効いとるわい、効いとるわい」

催淫クリームを塗り終えた荒沢は不敵な笑みを浮かべながら股間を観察し、蛭田はその成り行きを記録しているだけで手を出してこない。

焦らされることは分かっていた。しかし、いつもは拘束された状態で焦らされるのだが、今日は縄も器具も使わないでいた。

真奈美はたまらずに自分の手を股間に伸ばそうとしてしまうが、さすがに2人の男が見ている前でそんな浅ましいことができるはずもなく、両股を擦り合わせ身悶えることしかできない。

「ん……、ああ、うむ……」

白いタイルで覆われた静かな実験室で、下半身を露出した美しい人妻が腰をくねらせている。

妖しい光景だった。

「ひひひ、これが欲しいんじやろ？」荒

沢が極太の張り型を差し出した。

グロテスクな男根を型どっていて、催

淫クリームがべつとりと塗られていた。

「ああ、は、はい。欲しいです」

真奈美は待ちかねたように歓喜にも似た返事をする、無意識に張り型を受け取ってしまう。

「し、してもいいのね……？」

荒沢は頷くと張り型を持った真奈美の手を取って割れ目へと導く。

自ら張り型の先端を入り口にあてがうと、味わうようにゆっくり深々とほおばった。

「あ、はあ……」

真奈美は熱い吐息を吐くと、ゆっくりと張り型を出し入れし始める。

ふいに荒沢が催淫クリームの付いた中指を、えぐるように肛門へ突き刺した。

「ああ！そんな！ひいひい！」

真奈美は一気に絶頂へ追い立てられた。





荒沢が真奈美専用で作られた張り型で前を塞ぎ、蛭田が男根を模した流腸器のノズルを抽送する。ノズルの先からは射精の間隔と同じ速さで薬液が出ている。

あられもない格好で体を固定され、薬液を１リットル以上も飲み込んで腹が膨らみ、これ以上の責めは苦悶でしかないはずの真奈美の体は性欲の権化のように反応し続けていた。

「う……うむ、ぐう……」

うめき声しか出せないものの、体は正直だった。

真奈美の体は淫具を締め付け咥え込み、離そうとしなかった。

それどころか２本の淫具を自分の胎内に飲み込むような動きさえあった。

「なんて淫らな体なんだ……」

これには真奈美の体を知り尽くした蛭田も驚く。

「ひひひ、真奈美は本当にいい検体だわい」荒沢は張り型を動かす手を休めず、悶える真奈美を見つめた。

張り型は真奈美の弱点に合わせて作られていたので、思い通りの反応を出すことが出来た。

「ほれ、これはどうだ？こうはどうだ？」

荒沢は真奈美の顔を覗き込みながら張り型を巧みに操る。

「ああん！だめえ……！」真奈美の谷間から熱い飛沫が放物線を描いて飛んだ。

荒沢は真奈美のことが愛しくてたまらないようで、思わず潮が顔に掛かるのも気にせずツンと尖った肉芽に吸い付いた。唾液をいっぱい絡ませ、口で吸って、舌で転がす。

「あはあ……真奈美、イッチャいそう……！」

それを聞いた蛭田も肛内の弱点へ薬液が当たるようにノズルの位置を調整する。

「イクんだ！イケ！」

荒沢と蛭田は息を揃えて淫具を操り、絶頂へと追い上げる。

「あ、あ、真奈美、イクう！」

足の爪先から喉まで全身をのけぞらせ、体を痙攣させる。と、同時に蛭田は流腸のノズルを引き抜いた。

「ああおお……！」真奈美は声にならない絶叫とともに、肛門から薬液を激しく吐き出した。

排泄を止められてた苦しさからの開放感と絶頂感が入り混じり、自分が溶けて無くなるように思えた。

「真奈美、死んじゃう……」あまりの快楽に頭が真っ白になり意識が遠のいた。

それでも２人は２回目に向けて失神したままの真奈美の媚肉や乳房をまさぐるのだった。

仁美が前穴にパイプを咥え込みながら蛭田を後門に受け入れようとしていた。

「蛭田さん、はやくう……」

悩ましい声を出し、突き出した尻を振って蛭田の分身に当てる催促をする。

「スケベな牝め」蛭田は仕返したと言わんばかりに自分の剛直で仁美の尻を叩いた。スケベだと言われた仁美は顔を赤らめ振り向いて、違うと言わんばかりに力なく顔を横に振る。

蛭田が狙いを定めると、一気に奥まで押し入った。

「い、いい……！」仁美は愉悅の声を上げ、悦楽の渦へと飲み込まれていった。

史恵は黒沼に奉仕をしていた。後ろ手に縛られているので豊かな乳房を黒沼の中心に押し当て愛撫した。

「上手いぞ、史恵……」

史恵は十分に鎌首を上げさせると、今度は肉塊にしゃぶりついた。

舌先で袋の裏筋から舐め上げ、膨張した頭部に何度もキスを浴びせる。そして小さい口をめいっばいに開

き喉の奥まで受け入れた。

「おお……」黒沼は満足したように深い溜め息をつく。

史恵はゆつくりと頭を前後に動かし

奉仕を続けた。

荒沢は真奈美を膝の上に乗せ、屹立

としたモノを柔らかくほぐれた裏門へ

とあてがい、真奈美のヒザ裏を抱えた。

「いくぞ、真奈美」

「はい……」

荒沢は後ろへ倒れるように真奈美を持ち上げると、真奈美は自らの重みで

深々と串刺しになった。

「ああ……たまらない……」

真奈美はあまりの気持ちよさに体をブルツと震わす。

荒沢は両手をヒザ裏から太ももまで

撫で回しながら下げていき、秘肉に指

を這わせた。左右に開き、花びらをつ

まんでは肉芽を指先で転がす。

「そ、そんな事をされたら、真奈美……

…欲しくなっちゃう……」

荒沢は返事をせず、花弁をいじる手を止めない。

「……前にも欲しい……真奈美、前と後ろでイきたい……」



荒沢は数時間にも及ぶ宴の後に、特別室で真奈美と由紀子を同時に可愛がった。

濃密で充実した時間を過ごしたが、さすがに疲れ、ベッドに腰を下ろして2人を両脇に抱えた。

「今日はこのくらいでお開きにするかのう」荒沢は緊縛を解こうと由紀子の背中に手を伸ばす。

その時、真奈美は寂しさを感じていた。これからも毎日同じ幸せを与えてくれると疑わないものの、荒沢がどこか遠くに行ってしまうような一抹の不安を覚えた。

「……最後に、よろしいですか？」

荒沢の返事待つこと無く、真奈美は荒沢の力なくデロリと垂れ下がった肉塊の先端を口にして持ち上げた。喉の奥まで包み込み、先端まで戻す。

口の中で大きくなるのを感じると、幼子を抱いているような幸福感に包まれる。

根本を唇できつく締め、体部にいやらしく舌を絡め、頭を喉奥で優しく圧迫する。

「あん、ずるい。私も……」それを見た由紀子も荒沢の股間に顔を埋ずめ、袋を口に含み丁寧にしゃぶる。両手を後ろ手に縛られたままにそれ以上の奉仕は出来ないが、そのぶん懸命に愛撫した。

「2人とも上手くなったのう」

真奈美は荒沢を啜えたまま上目遣いで見つめ合う。そこに言葉はいらなかった。

そして、真奈美の心はこれまでに感じたことのない幸せの中を漂っていた。

この時間が終わって欲しくない、このまま時間が止まってしまえばいい、とさえ思った。

真奈美の乳首にぶら下げられた小さな鈴の音だけが、リーンリーンと静かに鳴っていた。

その3日後、荒沢が倒れたという連絡が全員に伝えられた。



大部屋に女性全員が集められた。荒沢が倒れたと聞いた時から自分達が今後どう扱われるのか不安でならなかった。すると白衣を着た見知らぬ男三人が入ってきて、全員の両腕を天井から吊るされた。女性達は何が起きたのか分からず怯え、されるがままにいるしか無い。「ワシが新所長の倉守だ。今日からここは『生体研究所』になる。お前らは甘やかされすぎて検体であることに忘れている！今一度しっかりと自覚しておけ！」



スキンヘッドでデブブリと肥えた男が言った。眼光が冷たく、血が通っていないように思えた。聞いていた女性達は恐怖と緊張で声も出ない。「ケケケ、竜井です、動物好きです、ケケケ」まるで河童のミイラのような、病的に痩せた男がケタケタと笑いながら言う。「動物好き」と自己紹介するには場違いだと誰もが思ったが、この時はその意味を知らずにいて正解だった。「石室です……」いかにも陰湿そうな男がつぶやくように名前だけを言う。

誰もが嫌悪感を抱くような風貌をした3人が、女をオモチャとは思ってないような目で吊るされた女を見回している。その視線に女性達は血の気が引いて生きた心地がしない。

「では、全員の身体検査を始めようぞ」

倉守、竜井、石室は、むしろぶりつくように「検体」に抱きついた。

「きゃー！」「ひいー！」全員が悲鳴を上げる。いきなり服を乱暴に剥ぎ取られ、生まれたままの姿にされた。恥ずかしいと思う間もなく全員が首輪をはめられた。首輪にはそれぞれ違う数字の札が付いていた。

「今からお前たちはその数字だ。それ以外の何者でもない。覚えておけ！」倉守の強引な物言いに真奈美を始め全員が絶望した。

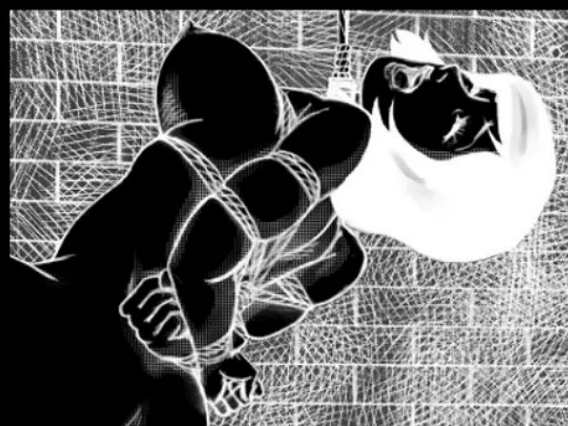
M奴隷として満ち足りた生活が無くなったことが信じられない。

しかし、体中を舐め回され乳首や媚肉をいじられると全身の力が抜け、濡れ始める。

（こんな男たちに嬲り物にされてるのに……）

真奈美は自分の体が恨めしかった。

やがて、あちこちで上がった悲鳴が静まり、喘ぎ声に変わっていくのだった。



奴隸妻真奈美の漂流

第二部 中編 痴獄の花嫁



倉守が分厚い唇で唾液で溶かささんばかりに体中に音を立てながらしゃぶりつく。籠井は美しい形の乳房に経のように吸い付き、爬虫類のような異様に長い舌で乳首を舐めまわし、強く吸い付く。石室は双臀を割り開くと、恥肉を検査するように指先で摘んで引つ張り、肛門の周りを円を描くように指を這わせてほぐしていく。

それはまるで悪魔が美女を生きたまま食らうような光景だった。

真奈美は気味の悪い男たちに翻られ鳥肌が立っていたが、程なくして熟れた体の奥に火が付き理性が溶け始める。

(た、たまらない……!)

全身の神経がジンジンと疼き、股間にいやらしい蜜がじつとりと溢れるのを自覚した。

(ああ……、真奈美の体はこんな淫らになってしまったのね……)

情欲の黒い雲が覆いかぶさり、いつしか恍惚の表情になっている。



「あ、はあ……」真奈美のぼつてりとした唇から熱い吐息が漏れた。

恐怖で強張っていた体が徐々にされるがままにできたのが分かると、男たちはお互いに顔を見ながらニヤリとする。

「し、して……、も、もっとして……」

呼吸が荒くなり息も絶え絶えに、真奈美はついに屈服した言葉を発して腰を揺らす。

「ククッ、実験用の牝のくせにいやらしいことをお願いするのう」倉守がわざとらしく言う。

それが合図だったかのように籠井と石室が翻るのをやめ、いやらしい目つきで真奈美の痴態を観察するように眺め始めた。

男たちは自らの性欲を満たすために女を翻っているのではなく、実験用の生き物としか見ていないのだ。

「お、お願い……、我慢できない……。もう、どうなってもいい……。真奈美をメチャクチャにして……」全身を甘美な痺れが覆うと頭が真っ白になり、他に何も考えられない。

「して……入れて……、前も、後ろも……」

これから始まる地獄のような実験の意図も知らずに、真奈美は不気味な男たちに向かって催促するように腰を突き出してくねらせていた。

石室がスイッチを入れると真奈美の全身に電気の刺激がほとばしった。

「ひいひい！」

真奈美は悲鳴を上げて縛られた体をめいっばいっばらせる。

石室の電気責めに声を上げない女はいない。電気責めと言っても低周波で性感帯を刺激するのが目的で痛みはない。それでも、あちこちを指先で摘まれているような感覚に体をガクガクと振らざるを得ない。

「最後に……こう」石室がボソッとつぶやき、別のスイッチを入れると、前後の穴に入れた電極付きの張り型が真奈美を体内から襲った。



「いやあ！」

さんざん蹴られてきた真奈美でも感じたことのない刺激が熟れた体を蹂躪する。

しかしやがて、それは甘美な刺激に変化していった。

「あ、おお……た、たまら……ない……！」

この世のものとは思えない愉悅に、だらしなく開いた唇から涎を垂らしながらうめき声を上げる。

（い……イッちゃいそう……。イかせて……）

かつての真奈美ならば変態的な行為で絶頂を迎えることに抵抗して気持ちを抑えていたが、今の真奈美は自ら絶頂への刺激を求める性獣の化していた。

それを見抜いた石室はニヤリとほくそ笑み、電圧のダイヤルを一気に最大まで上げる。

「ひい！だめえ！真奈美、イクうー！」

真奈美は上体をのけぞらせ白目をむいて全身を引きつらせると、ガクンガクンと全身を震えさせると、秘裂から熱い蜜が放物線を描いてしぶく。

そして頭の中が悦楽で真っ白になり縄に身をあずけるようにガククリと果てた。

「くくく。電気責めがそんなに気持ちよかったのか？」

倉森が、はあはあと息も絶え絶えにうつむく真奈美に聞くと真奈美の頭がコクリを頷いた。

「も、もつと……して……」

息も絶え絶えに自分でも信じられない言葉が真奈美の口から出た。

前後の奥深くに入れられた茹でタマゴに向かって蛇が少しずつ真奈美の中に入っていく。
蛇を、それも二匹を受け入れることなど恐怖でしか無かったが、じわじわと侵入してくる感覚に真奈美は体が熱くなってしまう。

(も、もつと奥へ……もつと動いて……)

禁断の欲求だと分かっていたとしても、真奈美にはもう自分を止める理性は無い。

乳首が尖り、股間がじつとりと湿る。

「ひひひ。美味そうに啜え込んでるわい」倉守が嬉しそうに真奈美の股間を下から覗き込む。

しばらくすると二匹の蛇が入り込む動きを止めた。狭い肉筒の中でタマゴを眼前にしたのだ。すると二匹の蛇はほぼ同時に口をいつぱいに開きタマゴを捕えはじめた。

「あ、ひいっ！」

その動きを体内でもはつきりと感じ取り真奈美は思わず声を上げた。蛇がタマゴをすっかり口に入れたことまで感じ取ってしまう。



「さすがだな。普通の女ならここいらで気が触れてしまうのに」籠井が舌を巻く。

そして、蛇が飲み込んだタマゴを蠕動運動にて胃へと運び始めた。

「いやあ！だめえ！」

あまりの感覚に真奈美は片足吊りの足を突っ張らせ仰け反った。自分の体内で、二匹の蛇の体の中を、タマゴが通過していくのだ。

「どうした？まさか二匹の蛇にサンドイッチにされてイクのか？」

真奈美はガクガクと頷く。

「は、はい……。真奈美……イキそうです……！」

そして、腸と膣のうすい壁を隔てて二つのタマゴ同士が擦れあった時、一気に絶頂へと登りつめた。

「ひい！イクう！真奈美イっちゃう！」

真奈美は全身をガクンガクンと痙攣させ、愉悦に満足したような笑みさえ浮かべていた。



ポンプの音が低い唸り声を上げると、枝分かれしたチューブに媚薬入りの浣腸液が流れ始める。

薬液が長いチューブを通り、それぞれの出口に到達すると一列に並んだ美しい美臀が一斉にビクッと震えた。

肛門にチューブを突き刺された時点で何をされるのかを観念していたので、誰も悲鳴一つ挙げなかった。

街で見れば誰もがハッとするような美人たちが、魅惑的な体を縄で縛られ、尻尾のようにチューブを突き出している。それを奇妙な三人の男がニヤニヤしながら眺めている。部屋にはポンプの音だけが静かに響いていた。

「うう…」「ぐ、う…」

徐々に入ってくる薬液がイリッとした。超えろと何人かが呻き声を上げ始めた。しかし、浣腸液の媚薬成分を腸壁が吸収し官能の芯をジンジンと刺激もする。

「まだ序の口だというのにだらしないな」そう言う倉守は持っていたファイルに何かを書き込む。

「そろそろ次の段階かの」石室がポンプの操作盤のスイッチを回す。

するとポンプの低い音に何かを回すような断続的な音が加わる。男性の射精と同じ間隔でビュッビュッと薬液を送り出し始めたのだ。

「ひいつ!」「だめえ!」

入ってくる薬液の変わりように今度は

それぞれが声を上げた。

浣腸の苦しさは媚薬によって燃えだした情欲が体中を渦巻き、肛門内に射精される感覚が加わる。「もう壊れるう!」「だめえ!お尻が狂っちゃう!」

誰もが膝をガクガクさせ立っていられない。

真奈美はというと、あられもなく足をガニ股に開きしどに濡れた媚肉をさらけ出して、早くも頂点に達しようとしていた。

真奈美はA感覚に囚われた牝獣そのものになっていた。

「い、イキます!真奈美イクう!」

しかし、全身を痙攣させ快楽の余韻に浸る間にも直腸に当てられる薬液を感じ取ってしまう。

「ああお、と、止まらないわ!またイクくう!」

真奈美は狂ったように全身を震わせて、ポンプが止められるまでイキっぱなしになった。



「手土産にいくつか差し上げましょう。どれも耐久テスト済みでキツイ実験にも使えますよ」
「ソレはウレしい。シカシ、ドレもゴクジョウでマヨッテしまう」

X国の医療視察団ゴビイ団長が床に拘束され局部を露わにさらけ出してる女達を見下ろす。
皆、体中の粘膜に催淫剤を塗り込められ、熱い息を吐き、物欲しいように体をナヨナヨを動かしている。どちらかの穴に挿入されただけで一気に登りつめるだろう。

(…早く、してえ…) (お願い、いじつて…) 誰もが心の中で哀願していた。

「それならば帰国までの間、いくつか試してみますか？」

ゴビイはニヤリとすると、どれにするか決めかねぬように目移りをしていたが

「デハ、コレと、コレを」と指差し、杉村香苗と鈴木史恵を選んだ。

「長い黒髪がお好みですね？」 そう言うとき倉守が二人の鎖を解き、立たせる。

二人は見初められたことに少し顔を赤らめつつも、ゴビイの2メートル近い黒い巨体に緊張を隠せずにいた。またすぐに拘束するために手足のバンドはそのままである。さらにそこへ犬用の赤い首輪をはめ、つないだリードをゴビイに渡す。

「両方共、人妻で経産婦ですから感度は最高ですよ」

ゴビイはリード手繰り寄せ、二人の美しい顔を覗き込み、舌なめずりをする。

「グフフ…コイツで狂ワセテヤルからナ」

そう言うとき、既にスーツの中で固く屹立している怒張を二人の腰に押し当てる。

「ひい！」

香苗は、あまりに巨大で何か分からなかったが、押し当てられてる物が何か理解すると恐怖で思わずゴビイから体をそらした。

「ああ！」

史恵は絶頂を迎えたような声を上げた。

腰から背中の上までに腕のような物が当たり、それが胎内を貫く感覚に襲われたのだ。

二人の反応の違いにゴビイは満足した笑みを浮かべる。

「部屋も用意してるので、こちらへ…」

倉守と二人の性奴を引き連れたゴビイは部屋から出ると暗い廊下の奥に消えていった。

三日後、X国の視察団は帰国していった。それ以後、香苗と史恵を見たものはいない。



第二部後編 獣欲の女神

奴隸妻真奈美の漂流





真奈美は夢を見ていた。

闇の中から赤黒い巨大な鬼の手だ
けがヌツと出てきて四肢をガツチリ
と掴まれる。振りほどこうとするが
鬼の力に抗うすべはない。

しばらくすると、手足を握られて
いる力に心地よさを感じ始め抵抗す
る気力が萎えていく。力強い男性に
抱かれているような安心感である。
すると別な手が現れ体中をまさぐ
り始める。

美しい形の胸が揉みしだかれ、豊
かな尻肉を掴まれ左右に割り開かれ
る。

揉まれた乳房は粘土を握ったよう
にグニャグニャになり、肛門はポッ
カリと10センチほどに開いたまま
肉ひだを覗かせ、女性器は花びらが
肥大し食虫植物のように獲物を待ち
受けていた。

(真奈美の体……こんなになって……
……すごい……)

いつの間にか真奈美の体をもて遊
んでいた鬼の手がタコの触手に変わ
っていた。

体中を絞るようにきつく絡みつき
吸盤で乳首やクリトリスに吸い付く。

(ああ……気持ちいい……)

夢の中にいてもピンク色の淫猥な
海が広がり、真奈美を海の底へと引
きずり込んでいく。

悦楽の浮遊感の中、どこからともなく無数の巨大な軟体動物が現われ体中をまさぐりついていた。

何十匹もの巨大なナメクジが体中を這い、手のひらほどもあるヒルがピチピチと腔に入り込もうとし、長大なミミズがゆつくりと肛門へ入ってくるのである。

(……う、う……ん……！)

あまりの甘美な感触に真奈美は声を上げようとしたが、声が出ない。

気がつくとも鬼の巨大な剛直が口に突っ込まれてゆつくりと抽送されていた。

血管が浮き出た男性の腕のようなモノがポツテリとした唇を押し広げる。喉奥まで押し入れられているのに苦しくはなかった。

舌と唾液で思う存分に愛撫した。喉奥を開け閉めして先端に刺激を与える。この後この男性器が自分を愛してくれのだと思うと口の中で優しくせずにはいられない。

すると、軟体動物たちが融合してさらに大きくなり真奈美の体を徐々に包み込んだ。

真奈美は巨大な軟体動物の体内で喘ぎ声も出せずに淫らに身悶えていた。

そして、消化液を分泌して真奈美の体を溶かし始める。溶けていく感覚が睡魔にも似た心地よさで、さらに全身の性感帯を攻められる快感と伴ってこの世のものとは思えない愉悅に浸った。

(このまま溶けていきたい……)

夢の中なので思考が停止しているが、目を覚ませば地獄が待ち受けているのである。



「荒沢は眼の前におろうが」

倉守が由紀子の孕んだ腹を指し棒でピタピタと叩く。

「タイナイソウよ」

真奈美は言葉の意味が理解できずに、戸惑った顔で由紀子の孕み腹を見つめている。

そんな真奈美を無視して倉守は話を続ける。

「荒沢の屈折した性的嗜好は母親の愛を知らんせいでな。だからこうやって胎内に戻してやったというわけよ」

胎内葬……

真奈美は非人道的な行いを理解し、血の気が引いていくのを自覚した。

「荒沢もこれで本望よの」

倉守は、うつむき加減の由紀子に気がつく、首輪につながった鎖を不満げにグイッと引く。

「ううっ」と由紀子が呻き上体を伸ばす。

涙を流し、涎を垂らしている由紀子に正気があるのか気が触れているのかは分からない。

「体の水分を取り除いて関節を外して圧縮すれば、胎児並みの体積になる。そのためには……」

倉守のウンチクなど聞きたくなかったが真奈美は耳を塞ごうにも両腕は縛られていて、目をつむつて顔をそむけるのが精一杯だった。

「政財界や上級民から予約が殺到しててな、母体の数を確保するのが大変よ」
そう言いながら縄でくびりだされた由紀子の豊乳を根元から乳首まで母乳を絞り出すかのように揉みしだく。太い指で乳首を転がすと「ん……、ん……」と艶めかしい声を上げる。

荒沢とは違い、倉守には女体への愛情は感じられなかった。女を研究所で飼っている実験動物としか見てないのだ。もしくは人形で思い通りに遊ぶように……

真奈美の膝はガクガクと震え、まともに立っていられない。

しかし、倉守の冷たい眼光に引かれるように顔を上げ、目を合わせてしまった。
「クッククック、次の実験体はお前だぞ」

倉守が悪魔のような笑みを浮かべると真奈美は恐怖で眼の前が真っ暗になり、声も立てずその場に崩れ落ちるように倒れてしまった。

長大な漏斗の口がゆつくりと恥孔に沈み始めると百合は「んっ」と小さく声を上げ、美しいラインの顎をのけぞらせた。そして、もつと奥に入れてほしいと言わんばかりに、窮屈ながらも腰をグイッと突き出して漏斗を受け入れようとした。前の秘孔もヒクヒクとうごめいてじつとりと湿る。

「けけけ。メス丸出しだな」

そう言うのと、籠井は手に取ったボウルから細長いゼリー状の物体を取り出し、説明も無しに漏斗へと入れていった。

マゾと化した百合は、入ってくる物が直腸を刺激する感覚とそれを受け入れることしか出来ない被虐感に浸っていたが、思わず聞いてしまった。

「ああ……なにを入れているの……？」

「カエルの卵さ」籠井はもったいぶることなく即答する。

漏斗を使われた時点で何かを入れられる覚悟をしていたものの、まさかそんなおぞましいものとは思いつきもなかった。そして今後の成り行きに気がついた。

「……ひ、ひい！いやあ！」

百合は泣き叫んで拘束された両足をばたつかせたが無駄な抵抗だった。

「そのとおり。お前の直腸の中でオタマジャクシを孵化させる実験よ」

籠井は手を止めずに説明を続けた。なにせカエルの卵は数メートルもあるのだ。

「なに、犬や猿の受精卵を子宮に着床させた女どもに比べれば軽い実験だろう？」

泣き止まない百合をなだめるように、空いている手で肉裂をくつろげて女豆をいじると、まるで操られているように百合は泣くのをやめた。この施設にいる女は全員、快楽が恐怖や不安に勝ってしまうのだ。

そういう体に変えられてしまったのだ。

「人肌で温めれば一週間後には孵化して、可愛いオタマジャクシを何千匹も出産するわけだ」

大量のオタマジャクシが外へ出ようと肛門を刺激しながら這い出てくるので、百合は気をやるかもしれない。百合の肛門から次へ次へとオタマジャクシが出てくるのを想像するとニヤケが止まらなくなった。

籠井のサービスで体が火照った百合は従順になり、入ってくるモノを自ら飲み込むように務めるのだった。

「百合、オタマジャクシをたくさん産むわ……、だから……もつと気持ちよくさせて……」

（ケケケ、次は蛇の卵の孵化実験にしようかな……、ケケケ……）



内診台の上で身悶えているのは、半年前に突如として失踪した自分の妻であった。最後に妻を見た時より肉付きが良くなり色っぽく見え、ひと目では気がつかなかった。愛する妻が拘束され、幾本ものチューブが広げられた股間に入り込んでいる。

淫猥で不条理な場面を目の当たりにし、目眩を覚えた。

「本人自ら実験材料になると志願してきたのだ。淫乱な奥さんよのお」隣に立っている倉守が嘘ぶく。

朦朧とした意識の中、真奈美が倉守を見るとその隣にはかつての主人が立っていた。

「あ、あなた……」

「お、おまえ！どうしたんだ！しつかりするんだ！」

妻の声を聞いたことでこれが夢ではなく現実であることを確信した。

「あなた……助けて……」

そうだ、真奈美は無理矢理に拘束されて淫らなことをされてるのだ、どうにかしないと……と思った直後に耳を疑う言葉を真奈美が口にした。

「真奈美……イキたいのにイカせてくれないの……」

思いもよらない言葉に真奈美の亭主は開いた口が塞がらなかった。

「……頑張ってキツイ浣腸にも耐えているのに……ご褒美をくれないのよ……」

便意を誤魔化すためだろうか、仰向けの腰を上げてウネウネと振ると、肛門から垂れた淫具が揺れた。今の真奈美は亭主が見ているように羞恥など無い一匹の淫らな性獣に堕ちていた。

今か今かと頃合いを図っていた石室が、真奈美に深く入れられた淫具を一

気に引き抜く。
真奈美の菊穴はもう一瞬たりとも我慢することはできなかった。

「ひい！あなた……！見て！真奈美が出るところを見て！」

薬液が一気に出口へ向かい、あてがわれた便器にあられもなく音を立てて薬液がほとばしった。

「ああ……、気持ちいい……」
腹部の苦しみが排泄とともにスーッと流れ出ていくのだ。

「ヒッヒッヒッ、この開放感がたまらないのだから？」

石室が耳元で囁くと、真奈美は小さく頷いた。

「このワシが開放してやったのぞ？」
言葉を植え付けるように追い打ちをかける。真奈美が再び頷く。その口元には笑みさえ浮かんでいた。

石室が夫に見せつけるように真奈美の唇を吸う。すると真奈美の方からも唇を尖らせ舌を絡めた。苦しみから開放させてくれた主人へのお礼である。

秘唇と胸の突端に指を這わせると真奈美は熱い吐息を吐き、美しい牝の顔になった。

その間も真奈美の肛門は大量の薬液を垂れ流し続けていた。





「X国で見つかった原始人のDNAを頂いたのでな、試しに人間の受精卵とかけ合わせて産ませてみたのよ。これなら人に妊娠させられるぞ」

ボビイと呼ばれたその獣人は内診ベッドの上に雌がいることを見つけると素早くベッドに飛び乗り、股間に鼻をつけクンクンと匂いをかぐやいなや、美臀を鷲掴みにして屹立したものをいきなり秘腎へと突き入れた。

「ひいひい！」

真奈美は悲鳴を上げてのけぞった。まるで後ろから肉の杭をズシンと打ち込まれたようである。

「グホッ！グホッ！」

ボビイは嬉しそうにさらに腰を振る。遠慮のない動物的な腰使いである。

「ボビイ、童貞みたいにつつくなよ」

倉守が言う他、二人がゲラゲラと笑った。

「よつぽどSの7番が気に入ったようだな」

獣人が連れてこられた時に交わらされることは予想したが、実際に体が触れ合うと身の毛もよだつ嫌悪と恐怖でしかなかった。

しかしやはり、マゾに堕ちた真奈美にはそれが体が燃えだす種火となる。後輩位での野性的な出し入れが自分を動物のメスであることを自覚させた。

「ああ……あああ！凄い！」

そして、真奈美は幸せを感じていた。遊びのセックスでもなく、性の実験でもなく、ボビイは本能のままに子孫を残すため自分と交わっているのだ。そんな行為はかつての夫とすらすら……

「これで二人はめでたく夫婦になったな。元氣な原始人の子を産むのだぞ」

真奈美が気分を出し始めたのを見て、倉守が手にしていたリモコンのスイッチを入れると、真奈美の肛門に埋め込まれた電極パイプが低周波を放った。

「ああ！それ！真奈美、狂っちゃう！」

A感覚を襲う刺激が心も体もドロドロに溶かす。低周波は隣の穴で暴れているのペニスにも刺激を与えた。「オウ！オウ！」ボビイは雄叫びを上げ、絶頂へと加速する。

もはや、ベッドの上で行われているのはオスとメスの交尾だ。

「真奈美も……、真奈美と一緒に……一緒に……！」

「オオオ！」

ボビイは獣の雄叫びとともに最後のひと突きを与え、真奈美の最奥へ大量の精を注ぎ込んだ。熱い子種が強烈な勢いで子宮口に当たると感じる、それが天国の扉を開く鍵になった。

「ひいひい！真奈美、イクうう……」

白目を剥き上体をのけぞらせて全身をビクンビクンと痙攣させ、頭が真っ白になりベッドへ倒れ込む。悦楽に漂う意識の中、ボビイの姿えたモノが自分から出ていくのが分かった。

「あ、ダメ……離れないで……」

天にも昇る快楽を共有したボビイが愛おしく思えた。この時間をもっと続けたいと思った。真奈美はベッドの上で反転して仰向けになりボビイの向かって股を開いた。

「……もつと……して……」

甘えた声で誘う真奈美の顔は、欲情したメスそのものだった。



奴隷妻真奈美の漂流

エピローグ



エピソード

今年の梅雨は気温が高く雨も多かった。

空はいつでも雨を降らせようと待ち構えているように重い雲を広げている。そんな蒸し暑い夕暮れの中、蛭田は古く寂れたアパートへと帰ってきた。

部屋へ入るなり蛭田は深くため息を付く。

あれから三年。

荒沢が倒れた直後に身の危険を感じて地方の街へ逃げて正解だった。会社にも何も告げなかったので解雇扱いになったはずである。荒沢の蘇生を信じてあの施設に残った黒沼がどうなったのか知る由もない。奴らなら邪魔者を消すことなど平然とやるだろう。

今は自分の命があるだけで幸運である。ただ、ひっそりと隠れるように暮らしていくしか無い。

しかしやはり、格段に落ちた生活レベルは満たされていなかった。

エアコンをつけ、パソコンの電源をつけ、冷蔵庫から発泡酒を取り出す。いつもの無修正のポルノ動画サイトにアクセスし、安いアルコールを一口飲む。

人差し指でホイールを回し画面をスクロールさせるが、代わり映えのしないサムネールが並んでいるだけだった。

ネットの中で性がどれだけ氾濫しようと。たくさんの女たちを自由にもて遊べていた現実とは比べようもない。これ以上にネット内と現実とが乖離している感覚も無いだろう。

ふと、スクロールする手を止めた。

気になるサムネールが目に入ったのだ。何が気になったのかを考える前に再生ボタンをクリックしていた。7、8人の海外の色んな人種の女性たちが組んず解れつ戯れている動画だった。

「レズビアンたちの乱交か……」

と思った瞬間、蛭田は息を呑んだ。





その中に真奈美がいたのだった！

画面を拡大し一時停止をして確認する。間違いない、川瀬真奈美だ。

音量を上げてみると懐かしい喘ぎ声が聞き取れた。

蛭田はさすがに動画をダウンロードし保存する。いつなとき動画が削除されるか分からない。

その動画は3分程で、ダイジェストでもなく試験用でもなく突然始まって突然終わっていた。誰か個人が撮影したものなのか海外で売っているパッケージ品の流出なのかも判断できない。

「いったい、なにがあったんだ……」

最後まで観ると、もう一度再生した。今度は食い入るように画面の細部まで確認する。

映っている場所はある冷たくカビ臭い実験部屋とは違って、清潔でさらびやかな場所だった。そして全員

の首に巻かれたピンク色のリボンが何者かの所有物であることを意味していた。

真奈美は撮影されていることなど気にかけることもなく性戯に没頭している。

これは海外の大富裕層の娯楽なのだ と確信した。



「用済みになって、そこへ売り飛ばされたのか……」

よく見ると以前の真奈美とは少しどこか違っていた。この三年の月日の経年劣化ではなく、どこか母親のような体付きのように見えた。

蛭田はしばらく考えたが、カーソルをコメント欄に合わせキーボードを打ち始めた。

『この動画の詳細を教えてください。これは何処で撮影されたものなのか。この3分以外の動画は存在するのか。全ての動画を見るにはどうしたらいいか』

返事など期待できるわけもないが……。打ち終えると激しい嫉妬の感情がこみ上げてきた。

真奈美に特別な感情があるわけではなかったが、自分には絶対に届かない場所へ行ってしまったのかと思うと胸に痛みが走った。悔しくて悔しくてたまらない。涙がこみ上げるのも自覚した。

こんな気持ちになることなど何十年ぶりだろうか。

外からホワイトノイズのような音がして、静かに雨が降り始めたことが分かった。

画面の中の真奈美は、嬉しそうな喘ぎ声をいつまでも発していた。

完